

翌日の夜、俺はイリアに呼ばれて、部屋に向かった。

イリアの方から部屋に呼ばれるなんて初めてだ。俺は、どう受け止めたらいいいのか、困惑していた。

「センサー、きてくれてありがとう」

もはや当初の嫌われていた時の面影はない。イリアは、ふんわりとした視線で俺を見つめ、まるで家族のように、俺を受け入れてくれている。俺は、なによりもそれが嬉しかった。

「はいつて」

イリアは俺を部屋に招き入れる。俺はそれに従い、部屋に入った。

「きのうは、ありがと。わたし、とってもたのしかった」

「俺のほうこそ、楽しかったよ。イリアの活発な姿を見られて、本当に楽しかった」

俺たちは微笑を向け合う。

イリアは照れ臭そうにしていたが、同じくらいの喜びを見せてくれる。

「それに、たすけてくれて、うれしかった。あんなにがんばって助けてくれるなんておもってなかったの」

「助けたなんて、言えないよ。ごめんな。イリアがまだ小さいってことを忘れて、注意をちゃんとしておかなかったのが悪いんだ」

「ううん。センサーは、とってもステキだったよ」

「はは……」

愛想笑いするしかない。イリアは、いつの間にかこんなにも俺のことを好きになってく

れていた。

「わたし、センサーのことがだいすき。あいしてる」

「イ、イリア？」

「センサー」

すとん、とイリアが俺の体に飛び込む。

「おねがい、今日はとまっていつて？ わたし、こんなきもちじゃ、ねられないよ」

「え、でも、それって」

「センサーとはなれたくないの。さみしくなっちゃうの。せつないの」

「い、イリア……」

「いいでしょ？」

澄み切った瞳が、俺をとらえて離さない。

こんなの、振り切れる奴がいるっていうなら教えてほしい。俺は当然、できなかった。

「分かったよ、泊まる。だけど、一日だけだぞ？」

「うん！」

それまでの切なそうな表情がうそのように、イリアの顔が華やぐ。

「センサーといっしょならそれでいい！ うれしい！」

こんなにも子供らしい無防備さを見せてくれるなんて、最初のころは考えられなかった。俺達成感にも似た感覚を抱きながら、しばし、イリアとの戯れの時間をすごすのだった。

その夜中のこと。俺はすっかり深く寝静まっていたのだが、物音がして目が覚めた。

俺とイリアは、離れた場所に寝ていた。一緒のベッドに寝たいとイリアがおねだりしたのだが、さすがにそれははばかられたのだ。

あの反抗的だったイリアが、よくもまあここまで反転したな、とは思ったものだが……これはさすがに、行き過ぎなのでは？

俺は、ごくんとツバを呑みこんだ。

イリアは、パソコン画面をじいっと食い入るよう見つめている。暗いから、よく見える。

それは、有名な匿名掲示板だった。その中の一つの板に、イリアは書き込みをしていたのだ。

「どうすれば、すきなひとに、ふりむいてもらえますか」

暗闇の中、イリアは独り言をつぶやく。

すきなひと……ま、まさか、俺のことじゃないよな？

寝付けなかったのだろうか……そう思っていたら、衝撃の光景が、そこに広がっていた。ちゅこ、ちゅこ、と湿った音が、響く。

「ん、あ、ふ……ん」

イリアの、鼻にかかったような小さい喘ぎが、口の端から洩れる。

うっとり赤らんだ頬は、まるでチークを塗ったかのように鮮やかに彩りを浮かべている。

イリアは小さいお尻をわずかに浮かせ、自らのパンツを横に広げていた。

その広げた隙間からは、まだまだつるつるの、幼女特有の割れ目がぷくっと呼んでいた。にちゃ、という粘ついた音は、この子の欲情を現す、女の淫蕩さの表れだ。

半透明の汁は、麗衣や涼音の汁に比べても透明度が高く、さらりとしている。未成熟さを強く感じさせる愛液だった。



「これ、で、ホントに、気持ちよく、なるの……?」  
ふわふわとした口調は、くぐもっていた。自分のしていることの意味が分かっていない、あどけない少女、それが今のイリアだ。

だまされてる、やめるんだ。

そう思うものの、口に出すことはできない。

「あ、は、う、ン……ううん、ン……ひゃふ……」

目の前で、自らの秘所に指を差し込むイリアは、やがて声を小刻みに跳ねさせ始めた。

「あ、や……やだあ、くうん……なんか、きちやう……」

ちゅこっこっちゅこっちゅこっ!

汁にまみれた指が、粘っこい音を立てる。

「あ、あ、あ、あ……あううッ」

びく、びく、と痙攣したイリアは、天井を仰ぐようにして一度、伸び上がる。

びん、びん、と両手足を引きつらせ、喘ぐ。

いったんだ……

俺は、その様子を眺めて、胸がざわめくのを感じていた。

少女の、恐らく初めての自慰、そして絶頂を、最期まで見届けた。

罪悪感と、それを上回る欲情が、胸を満たしていく。

股間にそびえる棒は、ムクムクと力をみなぎらせはじめていた。

「はうう、ン……」

愉悦の余韻を残しながら、イリアは、俺の隣に来る。

俺は、慌てて目を閉じた。気づかれただろうか？

とにかく、狸寝入りするしかない。

「センサー、みてた？」

びくついた手を俺へと伸ばし、俺をまさぐる。

その手は、俺の顔を撫で、髪をすく。まぶたの上をなぞり、頬をさすり、そして喉から胸板までなぞった。

「わたし、センサーのしたいとおもうこと、させてあげたい」

俺は、無言を貫く。ここで声を出してしまうと、流されてしまいそうだった。

「でも、わたし、まだ子供でよくわからないから……おしえてほしいの」

か細く可憐な声には、女に成長しつつある色香が、ほんの少し、宿っている。

あまりにも愛らしい、この年頃の少女特有の、誘惑だった。

「センサー、すき、すきい」

俺は、あまりにも可愛く、魅力的な声の響きに、耐えきれなかった。

持ちあがった男のシンボルに、イリアの小さい手が置かれる。

最初にかぶせるだけ。しかし、その手はやがて、指をほどき、一本一本が盛り上がる幹の部分に絡まる。

どこでこんなことを覚えたんだ。

すっかり硬度を上げた肉棒が、シコシコと上下にしごかれる。その手つきは、たどたどしいものの、男の壺を的確についている。

ぶくぶくに膨れた幹が、張りつめていく。びゆくびゆくつと震える先端が、先走り汁を分泌し始めた時、俺は耐えきれなくなった。

「そ、それ以上は、だめだ……」

俺はシーツを上げ、体を起こした。

「やっぱりセンサー……起きてた」

「……うん」

俺は目を開けた。もはやごまかすのは限界だった。

「きょうはね、どうしても、センサーに、すきな気持ちをつたえたかったの」

イリアの声が、上ずる。唾液たっぷりの口の中が、のどにひっかかったようだ。

嗚咽にいた声が何回か漏れる。その最中、イリアはその手を、俺の顔に触れさせた。

ぷにぷに、とした柔らかさが、顔に触れる。

「わたし、センサーのこと、さいしょは好きじゃなかったの……」

「知っているよ。伝わってた」

「なまいきな子で、ごめんなさい……でもでも、いまは、ね……」

イリアは、切なそうな瞳を、泣きだしそうに潤ませながら、俺の目の前に顔を寄せる。人形のように整った顔が、白くぼんやりと暗闇に浮かぶ。

美しすぎる。少女特有のクリーミーな香りとまって、イリアのふんわりとした青々しいフェロモンが俺の鼻腔に届く。

「ちゅ……」

気付いたら、イリアの小ぶりな唇が、俺の唇に重なっていた。



薄い胸、膨らみのないまな板のような胸部が、短い呼吸と合わせて上下している。信じられなかった。

俺のことを嫌っていて、避けていた少女が、キスをしてくれるだなんて。

「センセー、わたしのことを、もらって」

「そ、それは……」

「わたし、センセーのこと、とっても好き。がまん、できないのお」

「い、イリア、まづいんだよ、それは」

「センセ、と、アニメみたいな恋、したい。アニメの子みたいにかわいくなくて、センセに、わたしのこと、好きになってもらいたいのに」

「それは錯覚だよ、イリア。君には俺なんかよりも、もっと似合う男と出会える。俺なんか傾いちゃ、だめだ」

「やだやだ、わたし、センセじゃなきゃ、いや」

頭をしきりに横にふり、イリアは俺をひたすらに求める。

「センセ。わたしのこと、かわいっていったら……あれ、うそなの？」

「うそじゃないよ。イリアはかわいい」

「よかった。わたし、センセーをあいつてる」

「イ、イリア。まづいつて」

「わたしを、彼女にして」

ぷくつとしたふくらみが、肌着がずり上がっていき、露になっていく。

下腹部の白い肌が全部見えて、へこんだ下腹部、そしておへそが見える。

すぼまったおへそは小さい。おへそ、そしてウエストにかけてのラインは、ほっそりとしている。乱暴につかむと折れてしまいそうだ。

まだまだこれから成長の余地がたっぷりなの、未熟さがにじみ出ている美少女だ。

「ね、おねがい。わたしのいちばんのねがいごと、きいて？」

そうつと、イリアの手が俺の背中に回り、背筋をなぞる。

細長い指先が、俺の背中に食い込む。

ふつくらとした唇が、顎を伝い、喉へと降りる。

「イリアのおねがい、聞いて。センサーが好き、大好き」

「お、俺は」

「センサーの彼女になるの。これ、ぜったいな」

イリアは俺の喉に吸い付く。まるでそれは、男の性を吸い取ろうとするサキュバスのようだ。

胸は薄く、腰回りの肉付きも二人の姉に比べればまだまだだ。言ってみれば幼女そのもののイリアは、それでもなお、自分の知識をフルに活用して、俺に迫っている。

「ちゅ、ちゅう……」

わざとらしく音を立て、幼女の小さい口から赤い舌が伸びる。

「れろ、れる……れるる」

軟体動物のような舌が俺の喉から鎖骨へと這う。部屋のひんやりとした空気にさらされ、生ぬるく濡れる。

「う、く」

俺は、十歳以上も年下の少女に、翻弄されていた。

「ちゅぶ、ちゅぶ……ちゅるる、ちゅぶッ」

声よりも、唇が震えるような音、響きの方が強くなっている。俺は喉を晒し、甘い少女の愉悦にしばし酔いしれていた。

イリアは顔にかかる髪をかきあげつつ、俺の顔を上目遣いに見上げる。

「く、あ」

小悪魔めいた表情に、目が移ろう。うろろと視線が変わり、居心地の悪さと気持ちよさの入り混じった中、イリアは、性の喜びを熟知しているかのような技巧で俺を追い込もうとしていた。

「ん……しゅき、らいしゅき、センチ、ぜったい、はなれない……」

くりくり、と指先が俺の胸板をこする。イリアは俺の体に障りたいみだった。

俺の胸板は無毛で、ムダ毛はない。それゆえのザラザラ感が気持ちいいのか、イリアはすりすり心臓の真上当たりを、手のひらで擦る。

「センチ、どきどきしてる。イリアも、だよ？　ね、イリアの胸も、すごくどきどき」

イリアは俺の手を柔らかくこらえた。小さく、力の弱い手つきだ。そうしてゆっくりと、自らの胸に、俺の手を近づけていく。

「……ほら、どう？　ドキドキしてるでしょ？」

イリアの表情はうっとりとしていた。

「センチ、少しずつでいいの。イリアのこと、すきになって」

「い、イリア」

「イリアも、センセに、いっぱいつくします。だから、おねがい」

尽くす、だなんて言葉まで覚えたのか。イリアに日本語を覚えてもらうために、いろいろな漫画やアニメと一緒に見たのは、間違っていたのかもしれない。

だが、俺はもはや、この幼い少女の魔性の魅力にあらがえなかった。

「センセ、わたし、いまがいちばん、しあわせ」

ぎこちないが、鮮明な言葉で、イリアは俺に気持ちを伝える。その純粹で愛らしい告白は、子供っぽい……いや、子供っぽいからこそ、他の人からは感じることでできない、キラキラと輝くような価値があった。

「俺もだよ」

「ほんと？」

「ああ。イリアみたいな可愛くて一途な女の子に好かれて、嫌な男なんていないよ」

「いちず？」

「一人の人だけを愛する、ってことだ」

俺はイリアの顎を持ち上げ、上向かせた。

唾液に濡れて膜をはる唇表面が、とろりと濡れている。甘そうな唇を、俺はゆっくりと奪う。

「ん……んふ……ん……ん……ん……」

イリアは、唇をふさがれた直後はむずがっていた。急な息苦しさに悶えていた。が、俺の唇の温度が伝わってきていることに気づいたのか、すぐに動きを止める。

目を細め、ゆらりとした唇にきゅっとした力が入る。

ぬらぬら、ちゆるちゆる、という、互いの唇をねぶりあう音が、部屋中に響き渡っていた。

「本当に、いいんだな？」

「うん」

イリアはこくこくと頭を縦に振る。

「わたし、センセに、はじめてをあげたいの」

仰向けになったイリアは、ゆるりと両太ももを広げた。

細い脚の間、その付け根。そこには、ねっとりとした半透明の汁が、滴り落ちそうなほどに大量にたたえられていた。

少女、だが、女だ。

思いに心と体を捧げるには、十分なくらいには育っている。

そう主張しているようで、俺はかあつと頭の中がかき乱されるのを感じていた。

「イリア」

俺は、ベッドの上に仰向けになるイリアに覆いかぶさるように上に乗る。

小さい少女の体をつぶさないように注意しつつ、その未成熟な体の、細い太ももを割開く。

鮮やかに最多小さな花びらが、ぱっくりと開いた。

こんな小さいのに、ちゃんと女の子の形をしてる。

俺はそれが不思議でならなかった。少女は、まだまだ男を受け入れられるような体ではない。小さくもろく、俺が少し力をこめれば崩れてしまいそうなほどに細い。なのに、俺

を求め、イリアは、しなやかな肢体をくねらせ、まるで気高い海洋生物のようなフォームで女をアピールしていた。

「ほ、本当に、入れるぞ？」

「うん、きて」

イリアは、シーツをぎゅっと握る。それは処女特有のむずがるようなポーズで、俺の頭にかあつと血が上るのを感じた。

「イリア……！」

俺はイリアのくびれた腰を弱く掴む。ぐい、と手が食い込む。

「あうん」

俺の手つきにおびえたように背をそらし、小さい乳房がふるつと揺れる。ピンク色の乳首が、鮮やかに咲く。

俺の肉棒が、幼い割れ目に少しずつ入り込む。最初は亀頭だ。みっちりとした肉感の、すぼまった穴は、異物である俺の先端を拒もうとすぼまる。が、ぬらぬらとしたイリアのそこは、やがて滑らかな汁をびゆるると吹き始め、ぬらぬらと滑りをよくしてくれた。

亀頭を、割れ目にそってなぞりたてる。すると、少しずつ幼い割れ目が開き始めた。

くい、くい、となぞると、にゆるる、と音を立て、俺のモノがイリアの中に入り込んでいく。

思ったよりもスムーズに、亀頭からカリ首まで入り込んだ。もはやここまでくれば、イリアの中に入ったも同然だ。竿に絡まるじつとりとした幼女肉の感覚に、俺は酔いしれる。

「あ、ああ、すごい……イリアの中、ヌルヌルしてる」

「ん、く……」

「苦しいのか、イリア？」

「だ、だいじょ、ぶ」

イリアは額に汗を浮かべている。

俺のモノは、小さいイリアにはさぞかし大きく、中が窮屈なことだろう。俺は罪悪感にかられてしまっていた。

「やあん、やああ！ぬかないで！」

が、イリアは身をよじり、体を押し付けてくる。俺の勃起は、小さい割れ目から零れ落ちることなく、収まっていた。

「イリアは、センセーの彼女になるの！これだけは、ぜったいに、あきらめないの！」  
健気なこと極まらない。俺はうなずくと、イリアの腰を掴みなおした。

せめて、早く終わってあげられるように、腰の動きを本格化させるために。

「う、く、う、う」

俺が腰を振ると、みっちりとした肉のヒダが絡みついてくる。その感覚は、今までの中でも最も強烈な締め付けだった。

中がぎゅうぎゅうとしぼみ、絡みつくヒダヒダはまんべんなく肉の竿をしゃぶりたて、甘くきつい快楽を注ぎ込みまくる。

俺は、音を上げた。

「う、あ、ああ、出、で、る……イリア、出ちゃいそうなんだッ」

「センセー、おねが、い、イリア、センセーのものに、なりたいの！」

「あ、うああ……うああ！」

早すぎる。射精感がとどめきれない。あまりにもきついイリアの中の締め付けに、俺はもはや根を上げていた。

処女を失ったばかりだというのに、イリアは淫らに腰をくねらせ始める。

ぐい、ぐいっと、お尻をローリングさせるようにして、丸みを帯び始めた桃のような尻をくねらせる。

ねじりたてられるような動きに、俺のチンポは翻弄され、たちまち熱い衝動が切羽詰まったようにこみあげてきた。

もう限界だ。俺は、口にすることすらできず、腰をゆっくりと出し入れする。

「あ、うあ、ああ……！！！」

チンポの根本に溜まった濁流のような欲望が、幹を伝い、上がる。

出る、出てしまう、イリアの中に、俺の、精子が！

こらえきれずに、俺は全ての欲望を、幼い媚肉の中に解き放つ。

「うああああッ！！！」

「きゃうううんッ」





びゆくびゆくびゆくびゆくッ!!

亀頭が弾かれたように震え、イリアの熟しきっていない蜜壺に、全ての精を注ぎ続ける。男の欲望汁は、容赦なかった。

ロリータ少女の中身を蹂躪しつくしてもなお、浅ましくしゃくりたてつつ、精を吐き続ける。

「うあ、ああああ！」

俺は、全身の力が抜け落ちていくような脱力感を感じていた。

まるで、イリアはサキュバスだ。大人の男を誘惑し、精を搾りたてるサキュバスのような強いうねりと搾り上げが、俺の射精中の肉棒をもみほぐす。

長い射精の時間は、やがて、ゆっくりと終わりを告げた。

「ああ、ん……くうん……くうう、ん、ん……」

イリアは、口元に指をあて、艶めいた喘ぎをこぼす。

俺の精子を受け入れることができたのが嬉しいのか、小刻みに悶えながら、俺の勃起を啜えこみ続ける。

俺は、強すぎる射精快楽に、全身を引きつらせることしかできない。

「わたし、おとなになつたら、センセのおよめさんになる」

イリアは、俺の肩に腕を回し、すべすべの肌を俺に密着させる。

セックス直後の暖かい体を密着させた俺たちは、体を横たえながら、すぐ近くで汗ばむ顔を寄せ合う。

うつろに開く唇から、よだれの筋が流れ落ちている。

俺は指でそれを掬い取る。すると、イリアは、くすくすと笑った。

「しっかりとつかまえてね、センサー。だいすきだよ」

俺の胸に顔を埋めながら、イリアがいじらしく微笑む。俺はその小さな体を抱き寄せながら、この子を守り抜かなければいけないと、強い思いを抱いていた。

「ちゅ、ちゅ……ちゅるる、ちゅるん」

唇に、ぬらぬらとした感触が滑る。俺は

「幸人さんの覚悟の言葉を聞いて、私、感激しました」

俺に情熱的な口づけをするのは、麗衣だ。

俺の肩に両手を置き、顔を間近にくっつけ、鼻先を触れ合わせる。

甘い囁き、恋心と欲情を混ぜ合わせ、そのしっとりとした口づけにのせる。

麗衣の唇は、艶めいて輝き、セクシーに煌めいていた。

「すぐくかっこよかったよ、ゆっきー」

ちゅるる、という音と共に唇を吸われながら、股の辺りから聞こえる声に返答するように、俺は涼音の頭を撫でた。

場所は、俺の部屋だ。いつも俺と三人娘が集まって愛し合う時に、ここに来る。

「ステキだったよ、センサー」

イリアも、顔を上げて俺を見上げる。その唇の端からは、つうつと一本の唾液の糸が伸びている。

お嬢様の麗衣の端正な顔が、すぐ間近に映る。いつの間にか大人びた顔をするようになった麗衣は、何度もついばむように、俺の唇を吸い立てる。

「麗衣は本当にキスするのが好きだな」

「はい……こうしていると、幸人さんの素敵なお顔、みやすいから」

麗衣のささやきに身をゆだねる。すると、再び麗衣は俺の唇に自らの唇を重ねてきた。唇を触れ合わせた場所は、ぷるぷるに弾み、甘い汁を擦り付けてきている。俺はその唇

に舌を伸ばし、割り込ませていく。

にちゃにちゃの舌と舌が絡まる。口の中で二枚の舌がとろけ合い、唾液の海の中をかき分けるようにしゃぶりあう。

「わはア♪ オッパイの間で、ゆっきーのぶつといのがまた大きくなった♪」

涼音は、俺のチンポを豊かな胸に挟み込みながら、オッパイを上下に揺さぶるようにしてしごきたててくる。

オッパイの谷間は肌がすべすべで、乳肉は抜群に柔らかい。そのため、挟み込まれて圧迫されると同時に、包み込まれているような安心感が満ちていく。

「ゆっきーのパイズリ好きには困ったもんだよー♪ ま、それだけ涼音ちゃんのエッチが上達したってことかな♪」

涼音は俺とのセックスに非情に積極的だ。こういった特殊テクにも熱心で、俺のオッパイ好きに目を付けたためか最近パイズリにご執心だった。

「ほらほら、ゆっきー♪ うちのギャルパイズリ、どう？」

涼音はセクシーにくびれた腰をうねらせ、巨乳を使って俺の肉棒をこね回す。

滑らかな乳の表面は、汗と俺の先走り汁にまみれ、てかてかと光っている。

美しさの中にも淫らさが同居し、俺の肉棒をぎゅっぎゅっつと搾りたててくる。

美乳の間に埋もれた肉棒は、次第に強くなる圧迫にさらされ、徐々に搾り上げられ始めた。

ずりゅ、ずりゅりゅッ。

そんな粘着音とともに、肉棒全体に、甘いしびれが広がり始めていた。

「センサー、わたしのこともかんじて」

イリアは、パイズリされている最中の亀頭に舌を伸ばしつつ、表面をなぞりたてている。俺の一番気持ちいい場所を、イリアは知り尽くしている。亀頭を舐め、表面をペロペロと舌で這いまわす。すると、竿の芯に強い電気のような快感が駆け抜け、一気に射精感がこみあげてしまう。

「うふふっ。やっぱりセンサー、ここがすきなんだあ」

イリアは俺の反応に、すこぶる上機嫌そうにしつつ、より敏感な鈴口に舌先をあてがった。

既に先走り汁が出始めている先端の穴を、イリアはしつこく、何度もなぞる。すり、すり、すり、すりッ。

「ん、あ……く、う」

鋭敏な感覚とともに、熱い塊が、股間のものに溜まっていく。

とくん、とくん、と、鼓動とともに、カウントダウンが始まった。

俺の肉棒がぶるぶると震え始め、射精直前のわななきを見せ始めていた。

もう少しで射精しそうだ。

「ごめんな、俺ばっかり気持ちよくなっちゃって」

「いいんです。ご奉仕するのが私たちの喜びなんです。それに……」

「ああは、おなかの赤ちゃんに差し支えそうだしねー」

「わたしも、ホントは入れてほしいけど、元気なあかちゃんをうみたいから、がまんするの」

みんなは、自分のお腹をいとしそうにさする。

そのお腹には、俺と彼女たちの愛の結晶が、命を宿していた。

俺たちは、結ばれた。

もしかしたら不健全とか不潔とか言われるかもしれない。だが、この想いは純粹なものだと信じている。

俺は、彼女たちを愛している。

彼女たちも、俺を愛してくれている。

奇妙な偶然から始まった、この縁は、きっと運命だったんだ。

俺は今、そう強く感じていた。

「う、あ……で、でそう、だ！」

精の塊が轟き始め、みんなへの想いを、形作っていく。

麗衣と涼音、イリアが、俺の股間に跪き、射精を心待ちにするように、穏やかな顔で射精を待つ。

「愛してます、幸人さん」

「愛してるよ、ゆつきー」

「あいしてる、センセー」

それぞれが、それぞれの言葉で俺に愛を誓う。

その晴れ晴れとした顔に、俺は、思いのたけをぶちまけた。

どびゅ、びゅるる、びゅるるるるるッ!!

「きゃああああんッ！」

「ああん、はああんッ！」

「あはあん、あつういッ！」

熱い精子が、大量に彼女たちの美しい顔に降り注ぐ。

白濁液に染まる美少女たちの表情は、そのどれもが喜びにうっとり染まる。

「みんな、愛してるよ」

俺たちもつれあうようにして、横になった。

息を荒らげ、仰向けになる俺に、皆が重なってくる。

心地よい重みが、俺を満たしていく。俺は、これからもこうやって、全力を振り絞って、愛し合っていくのだ。

やがて訪れる新しい家族を迎えた後も、こうやって愛し合っていくのだろう。いままでのことをかみしめるようにして、寄り添いながら、ずっと。